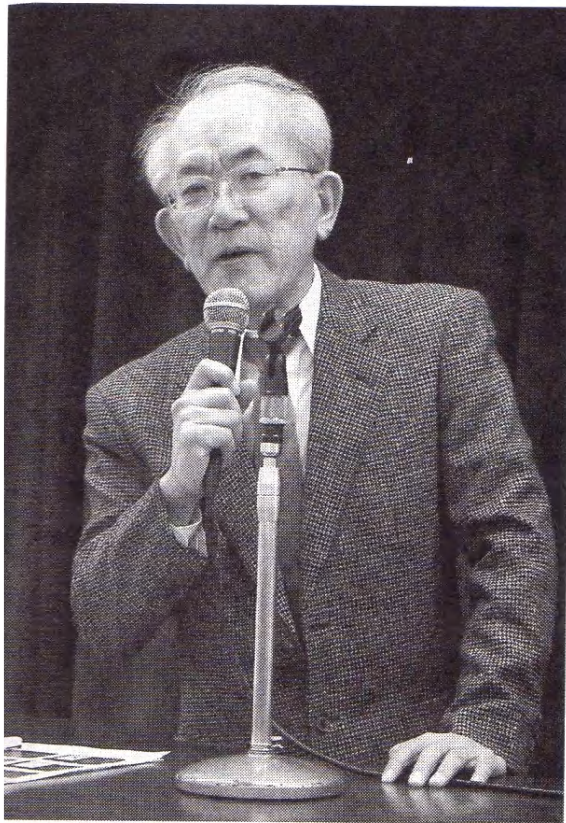


製鉄記念室蘭病院 田原小児科長が講演

発症時の対処法解説

「食べる工夫」転機訴える



児童生徒の生命に危険を及ぼす食物アレルギーが発症した場合にはどのようにしたらよいのか。室蘭市教育委員会は「このほど、市内の教育関係者を対象にした講演会「学校における食物アレルギー等への対応」を市文化センターで開き、約1000人の出席者が正しい知識を身に付けた。

(有田太一郎)

食物アレルギーや誤嚥が原因で児童が死亡した事故が道内外で発生したことを受けて企画した。講演に先立ち

市教委の山田進教育長が「実効ある校内研修を行い、個々の児童生

食物アレルギーについて解説する田原科長

徒への対応に努めてもらいたい」とあいさつした。

講師は製鉄記念室蘭病院の田原泰夫小児科長。「食物アレルギー、誤嚥 教育現場で何をすべきか」との演題で、食物アレルギーの仕組みや発症時の対応、アドレナリン自己注射薬（エピペン）の使用法、誤嚥による窒息事故への対応方法などを説明した。

田原科長は食物アレルギーにおけるギャップとして、捉え方と症状イメージの2点を提示。捉え方については「抗体価が高くてもアレルギー症状が出ないことも多い。小学生の時はダメでも中学生になると大丈夫という人もいる。食べるのを制限する医療から食べる工夫をする医療への転機にきている」と指摘した。

症状イメージに関しては「食物摂取からアナフィラキシー発症までは平均22分との報告があり、食べてから1時間以内は心停止となってしまう。迷って対応が遅れるのが一番まずい。食後1時間、発疹、話すことができないの三つがそろったら対処が必要。子どもの前から離れることがないよう2人以上で対応するようにしてほしい」と述べた。エピペンの使用についても「全国では408の使用例があり、室蘭市内でも処方されている児童がいる。児童生徒が自分で打てなくなる場合があるので、保護者に使用に関する承諾を事前にもらっておけば使用することが許される」とアドバイスを含めた内容に参加者は真剣に聞き入っていた。